

ふるさと再発見

～重源上人の里 みてある記～

(四) 佐波川関水と木津^{きづ}（奈良定屋敷跡）

徳地を縦断している佐波川は、徳地の北部に源を発し、柚野地区山間部の溪流を集めて大原湖となり、さらに南下して台山を深くけずり、裾野に広がる船路をうるおし川幅を広げて蛇行し、引谷川と三谷川を集めて下り、堀で島地川と合流して悠々と流れて防府市をうるおし瀬戸内海へ注いでいます。

その佐波川の上流、台山の麓にある発電所の側に国指定史跡「佐波川関水」があります。

重源上人は徳地の^{そまやま}杣山から切り出した用材を川の流れを利用して運びました。しかし、川底が浅く水量が足りないため、巨材は浮いて流れません。

そこで水かさを増すために、川をせき止めて、その片隅に巾三メートル、延長四十六メートルの水路を造り、両岸と川床には石を敷きつめて、川の流れの勢いを利用して材木を流したもので、これを「^{せき}関水^{みず}」といいます。

川底が浅く水量の少ないところには、こうした関水を次々とつないで海へと運ばれていったのです。東大寺造立供養記によると、木津から海に至るまで、百十八か所の関水を造ったとのことですから大変な工事だったでしょう。

木津は三谷川が佐波川との合流地点で、小字名を「きわず」といいます。木津は引谷川が佐波川に合流する川口にもあったといわれています。上流から運ばれた用材を木津に止め集めて、重源上人に伴って職人衆と共に徳地に下向した、山行事職頭領の橋奈良^{やまぎょうじしよく}定^{たちばななら}が^{さだ}検査をして、東大寺の^{ごくいん}極印を押して奈良へと運ばれたのです。



橋奈良定の墓



佐波川関水

橋奈良定は東大寺再建事業の後も、奈良には帰らずこの地に土着したので、八坂の乙女に奈良定屋敷跡があり、子孫は奈良定姓を名乗り、現在まで続いています。

裏山には先祖の五輪塔など古いお墓があります。

なお、極印は、鉄製の焼印で印面は5.5cmに3.3cmで「東大寺」と彫っており、現在は防府市牟礼の阿弥陀寺に所蔵されています。